

佐世保における九十九島と内陸の結びつきの変遷

THE CHANGES OF RELATIONSHIP BETWEEN A KUJUKU-SHIMA ISLANDS, ARCHIPELAGO AND INLAND IN SASEBO CITY

伊藤 弘*
Hiromu ITO

This study aims to clarify the changes of relationship between Kujuku-shima islands, archipelago and inland in Sasebo City. Though a Kujuku-shima island was designated as national park due to its archipelago landscape from the view points, administration established the facilities not focusing on the landscape from view points and residents don't enjoy the landscape from view points. So, visitors don't see the archipelago landscape from view points but archipelago image. It can be said that national park administration should be put in operation with the regional culture.

Keywords: *Natural Scenic Area, archipelago landscape, national park, visible area*

自然風景地, 多島海景観, 国立公園, 可視領域

1. はじめに

本来, 自然風景地の利用と保全を謳っている国立公園では, 現在生態系をはじめとする環境保全活動が活発に行われている。国立公園制度運用開始時には, 自然風景の利用ともいえる観光開発を視野にいれた地域選定が行われていたにもかかわらず, 利用計画は保全計画に比べて計画の目標における活動と場所の関係が必ずしも明瞭に示されないまま今日に至っている。国立公園においては, 保護と利用は相反する概念ではなく, 利用するためには保護していかなければならないという表裏一体の概念であり, 双方の計画を策定することではじめて国立公園の計画といえる。しかし, 現状では保全計画が主体となっており, それに従ったゾーニングや利用調整地区の設定などがなされており, 改めて国立公園ないしは自然風景地の利用のあり方について検討する必要がある。

国立公園の利用に関しては, 景観を把握したもの^{1) 2) 3)}, 混雑感から評価したもの⁴⁾ や利用計画のあり方⁵⁾, 地域指定と景観変化の関係⁶⁾ などが論じられてきているが, 国立公園に指定された地域においてどのような施設が整備され, それによって公園の資源を利用者がどのように受け止めてきたのかを把握したものはない。本研究では, 後述するように, 内陸の展望地から展望された多島海景観が評価されて国立公園に指定された(同じく多島海景観を有する瀬戸内海国立公園では展望地からの展望が指定の主要因であった⁷⁾)

にもかかわらず, 現在ではカヤックや遊覧船など海上での利用活動が主となっている長崎県九十九島(西海国立公園)を対象に, 島々が佐世保市域において, 島でない陸域(以下, 内陸)との関係の変遷と利用者がどのようにそれを受け止めるようになったのかを明らかにし, 九十九島の展望利用が発達しなかった要因を考察することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象地

対象地は長崎県佐世保市の九十九島である。九十九島は佐世保港が元々軍港であったために, 人為が入らないまま国立公園に指定された。指定されるにあたって調査委員は主に展望地からの眺めを古来より名勝として知られていた宮城県松島との比較によって評価し, 指定に至った⁸⁾。指定当初は九十九島と併せて展望台の適地があることも評価されていた⁹⁾。現在の公園計画でも九十九島の保全方針は「特に展望対象として重要な島嶼の地形及び植生の改変を避け, 景観の保護に努める」ことを最初に提示しており, 九十九島をまずは展望の対象と捉えていることがうかがえる¹⁰⁾。九十九島の島数は260余と言われており, 現在ではエコツーリズムの一環としてカヤックを利用したガイドツアーや遊覧船がその主たる利用となっている¹¹⁾。国立公園指定の際に評価されていた展望地の一部は管理され

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科 准教授・博士(農学)

Assoc. Prof., Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Ph. D. in Agriculture

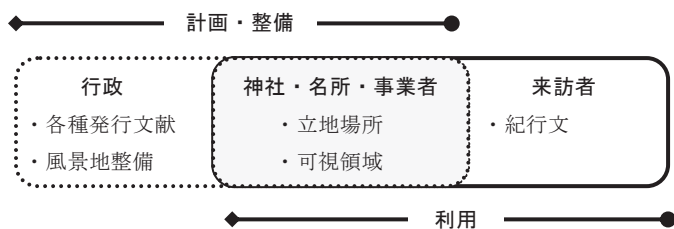


図1 自然風景地における各主体の関係

ないまま植生が成長し、現在では九十九島を望めない状態になっているものもある。

(2) 方法

まず長崎県や佐世保市による調査報告書や案内書等各种発行物から、行政等為政者が九十九島をどのように捉え、それに基づいて風景地としてのどのような整備をしてきたかを把握する。風景地とは、見る場所（視点場）と見られる対象（視対象）だけではなく、対象の有する意味から成立し、また指定当初評価された多島海景観の展望に関する変遷をみるため¹²⁾、既往研究を参考に視点場・対象空間・対象の意味への働きかけを項目として時代ごとに整理した¹³⁾。自然風景地における視点場は行政によって整備される展望台だけでなく神社や宿泊施設・飲食店などもあり、それらも来訪者によって利用され、風景地としての性格に影響を及ぼすことも考えられるため、地域にとっては整備主体として捉えられる。

次に、利用者が九十九島をどのように受け止めてきたのかを把握した。自然風景地の利用者は、大きく当該地域において環境を資源として認識し、それに応じて業を営む観光関連業者と風景を基準にその位置等を定めていることも考えられる地域における身近な公共空間である神社や名所、観光関連業者と神社や名所を訪れる来訪者に分けられ、本研究ではそれぞれを把握する。神社および観光関連業者は、風景地の整備主体であると同時に利用者でもあるといえる（図1）。

自然風景地の眺めを利用する観光関連業者として今回取り上げる対象地の宿泊施設および飲食店は、過去の分布については佐世保案内書や地形図等から把握し、現在の分布については2011年7月時点でのタウンページに掲載されている情報を元にArcGISを用いて分布状況を把握した。さらに、九十九島との関係をみるために、その分布を10mメッシュマップより算出した多島海景観の可視領域との関係から分析した。植生等地物は管理によって高さを色々と調整できるため、可視領域は地形データのみを算出の根拠としている。神社および名所として知られている資源を各種史料から把握し、その分布状況と多島海景観の可視領域の関係も分析した。これら宿泊施設および飲食店と神社の分布状況は、当該地域（佐世保市）における景観の利用状況を把握できると共に、来訪者にとって視点場ともなり、風景体験を提供しうる点で視点場整備の一端も担っているといえる。

来訪者の捉え方は紀行文および随想文の描写から把握した。紀行文や随想文は、発行当時の人々の空間の捉え方を反映すると同時に、人々の空間の捉え方に影響を及ぼすことが考えられる¹⁴⁾。既往研究でも、紀行文からかつての景観や観光資源を捉えようとしたものも

表1 自然風景地の整備

時期区分	視点場	対象空間	対象意味
軍港設置以前	1889 佐世保鎮守府開庁	1889 佐世保鎮守府開庁	1889 佐世保鎮守府開庁
戦前	1916 輪渡越の発見	1904 軍港起工	1927 日本新百景 海岸の部でトップ
	1920 皇太子が輪渡越に登	1916 軍港竣工	
	1924 相浦弁天島での海水浴施設設置		
	1931 輪渡越線道路開通		
	1932 輪渡越までの市バス開通		
戦後	1934 佐世保軍港境域での観光の制限	1940 相浦火力発電所整備	1933 風致地区指定
	1948 貿易港に指定		1945 鎮守府廃止 1947 国立公園指定請願書提出 1948 貿易港に指定 1950 西海国立公園期成会結成 日本観光地百選・海岸の部3位
高度経済成長	1952 遊覧船「西海」運航開始		1954 西海国立公園決定
	1953 鹿子前に市営水族館会館		
	1953 九十九島遊覧船「さいかい」就航		
	1955 観光遊覧船「さいかい」の定期運行	1956 カキ養殖開始	
	1956 市バス弓張岳戦運行開始		
	1957 秩父宮妃輪渡越に登る		
	1959 輪渡越-鹿子前 観光観光船「西肥丸」就航		
	1959 石岳展望台完成		
1961 石岳-鹿子前 観光道路開通			
1962 弓張岳展望公園整備			
1964 烏帽子岳「青少年の天地」整備			
1965 弓張岳展望地造成			
安定成長		1979 田崎真珠 養殖場開	
1980 展海峰造成			
1991 冷水岳公園 開設			
1994 「鹿子前パールシーリゾート」開設			

ある^{15) 16) 17) 18)}。これらは、既往研究¹⁹⁾を参考に、各種電子アーカイブ（青空文庫、国会図書館近代デジタルライブラリ）から“九十九島”および“佐世保”を用いて検索し、また「明治紀行文学集（筑摩書房、1974）」「現代紀行文学全集（ほるぷ出版、1976）」「トラベルガイド（山田書院、1999）」「ふるさとへの旅（国際情報社、1977）」「美しい日本の旅（学研、1974）」から佐世保および九十九島に関して記述している文献を抽出した。

以上の分析より、九十九島と内陸の関係を、九十九島湾での遊覧や養殖を営むなど湾を利用し、対象となる多島海内もしくは隣接する至近な空間で様々な活動が行われることを「物理的な結びつき」、展望地から展望するなど、対象となる多島海とは隣接していない空間で眺めることを「視覚的な結びつき」として整理した。

3. 佐世保行政による自然風景地の整備（表1）

行政による自然風景地としての整備の変遷をみるうえで、時代区分を地域が大きく変容した軍港設置以前（～1903）、戦前期（1904～1940）、戦後期（1945～1953）、高度経済成長期（1954～1973）、安定成長期（1974～）と区分した。

(1) 軍港設置以前

佐世保鎮守府設置以前、佐世保は総数800世帯ほどの小規模集落が散在している一寒村であった。わずかに、佐世保浦のみが宿駅として存在するのみであった²⁰⁾。産業も基本的に農業主体であり、佐世保湾に面して数戸の自給自足をしている半農半漁集落が存在しているに過ぎず、その多くは一本釣りであった²¹⁾。

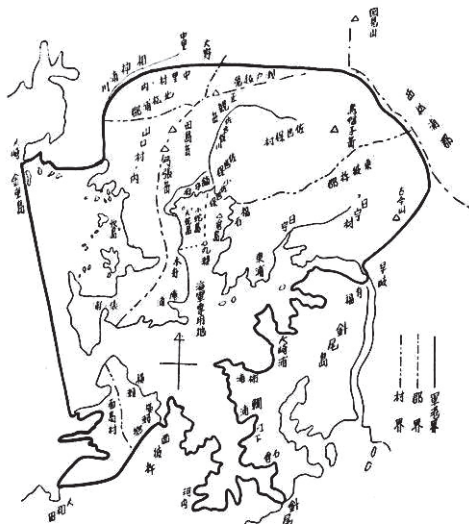


図2 佐世保軍港の範囲

九十九島周辺では、平戸八景が古来より名勝として示されていたが、そこに九十九島は入っていなかった。平戸八景（高巖・潜龍水・石橋・大悲観・眼鏡岩・岩屋宮・福石山・潮目）は地形によって形成された奇岩怪石を対象にしており、海の眺めはそもそも関心に入っていなかったことがうかがえる。

この時期は風景地整備としては特に何も行なわれていなかった。海は眺めの対象にはなっておらず、生業を営む場として九十九島は沿岸域でのみ物理的に結びつけられていたといえる。

(2) 戦前期

佐世保湾は海外との出入口が1ヶ所しかなく、湾内は水深が深いため、日本海軍が軍港として選出し、1889年に鎮守府を設立した(図2)。鎮守府設置が噂にのぼりかけた1884年には人口が約3,700人の一寒村に過ぎなかった佐世保は、1888年には約7,000人、1892年には10,000人超となっており、市街地化は急速に進んだ²²⁾。この頃は宿屋や料理屋飲食店に関して取締規則が発布され、その運営方針等が定められていた²³⁾。この頃佐世保は鎮守府を中心に発展しており、官庁や企業およびそれに付随して盛り場が鎮守府周辺に集積していた。また、軍港の竣工により港における活動は1926年に軍港の一部が指定港湾となつて商港に発足するまで²⁴⁾は、港内の様々な産業活動は制限されていた。

鎮守府開設後、佐世保ではもっぱら海軍に依存した行政運営が行われていた。第一次世界大戦による特需は佐世保の発展に拍車をかけたが、1922年のワシントン軍縮会議等による軍縮の傾向は、それまでの海軍に依存した産業のあり方を見直し、新たな産業を講ずるようになった²⁵⁾。その中で、1927年に産業立市方針が策定され、農業・商工業・水産業・林業に観光業が初めて取り入れられた²⁶⁾。この頃、外客の誘致を目的として、九十九島を中心に、鶴渡越・将冠・烏帽子などを含めた地域を対象に一大公園を建設する計画が起こった²⁷⁾。そもそも佐世保港の外海に位置している九十九島は、道路開発調査のために鶴渡越を訪れた実業家の松尾良吉がその絶景を発見し、観光地化を思い立った²⁸⁾とされる。住民の協力により1927年に大阪毎日新聞と東京日日新聞社が行った日本百景の海岸部門で一位をとる²⁹⁾。この時期、鶴渡越など一部の展望地が整備され、1931

年には都市計画法適用による道路網整備の一環として鶴渡越線が整備され³⁰⁾、1932年には市バスが鶴渡越線を設置するなどしていた³¹⁾。また1933年には鶴渡越と九十九島が、「市街地ノ膨張」から景勝地を守るために風致地区に指定された。ただし、鶴渡越は九十九島の展望地としてよりも地形によって「豪快ナル風致ヲナス」ために指定されている³²⁾。一方、九十九島は「鶴渡越よりの遠望絶佳」と評されており、鶴渡越は九十九島を眺める展望地として認識されていたものの、展望地としての価値は第一義ではなかった³²⁾。それ以前の1912年に発行された「佐世保案内」でも、九十九島は鶴渡越の説明文において示されるのみであり、風致地区の指定内容と同じく九十九島だけでは資源として取り扱われておらず³³⁾、九十九島は鶴渡越の価値を示すために用いられていた。民間人は、鶴渡越からの九十九島を対象とした写真撮影や双眼鏡の使用など様々な事項が規則によって禁止され、太平洋戦争に突入するに及んで、鶴渡越への登山も禁止された³⁴⁾。

佐世保市に隣接し、九十九島を有していた鹿町では、1927年ころから真珠の養殖が九十九島湾にて行われるようになっていた³⁵⁾。

この時期は佐世保港周辺を隔てて九十九島が内陸と視覚的に結びつけられ始めたころといえるが、九十九島の眺めはあまり評価されず、あくまでも鶴渡越の価値を示すものであり、鶴渡越に附属するという主従関係が成立していた。

(3) 戦後期

西海では終戦と同時に鎮守府が廃止となり、復興委員によって水産基地や国際貿易港と並んで観光都市がその後の佐世保市行政における目標の一つとなった³⁶⁾。戦前期に森林公園を企図した中心人物である中田正輔が市長に就くと、市内各所に30を超える都市公園が整備されると共に、九十九島を中心とした西海国立公園請願運動が活発になった³⁷⁾。これと並行して、1950年に毎日新聞社・日本観光地選定会議共催による日本観光地百選の国民投票が行われ、戦前期に行われた日本百景での選出と同様に住民たちの協力のもと、九十九島は海岸の部で3位に入賞した³⁸⁾。また、1953年には田村剛が佐世保市主催の講演会「西海国立公園候補地と観光施設」にて、西海国立公園の最大に利用は上から展望することである、と述べている³⁹⁾。また、それに先立って1952年に行われた長崎県による学術調査においては九十九島を「山上からみてよく、海上からみてよく、各々その趣きを異にする」と表現し、展望地として将冠岳・弓張岳・冷水岳・長串山を挙げている⁴⁰⁾。また、この頃発行された観光案内においても、九十九島の眺めを中心に鶴渡越・弓張岳・烏帽子岳・石岳・牽牛崎が紹介されている⁴¹⁾。

軍の施設は文化施設や住宅地、商業地など様々な用途に転換されていった⁴²⁾。この時期、新たに展望地として整備された、戦時中は軍のレーダー等が設置されていた⁴³⁾旧田島岳砲台のあった鶴渡越に近い弓張岳を「つつじの名所」にするため、ツツジの植え付けを行ったのを皮切りに烏帽子岳や鶴渡越などではウメやサクラ、ナンキンハゼなどが植えられていった。また、佐世保市に隣接する鹿町でも大観山に展望台を設置し、その周辺にツツジの植栽などを行っていた⁴⁴⁾。1952年には、公園化運動の一環として九十九島の島々約30島を買収し、1953年には遊覧船の運航が開始され、沿岸域に市営水族館が開館するなど、海へのアクセスが急激に容易になり、その機会も増えたといえる⁴⁵⁾。

この時期は戦前までは佐世保港を隔てて視覚的にのみ結びつけられていた九十九島が、遊覧船の運航などにより内陸と物理的にも結びつけられたといえる。

(4) 高度経済成長期

1954年8月の国立公園審議会総会にて西海国立公園が実現された。直後に発行された「佐世保市史」では、九十九島を「(本領は,) 何といってもこれらの島々を水あくまで清い海面に浮かべて見てはじめて知ることができ、近くの山頂からの大観は他の追従を許さないものがある。」「舟を出してその中に入れば、自ら一幅の画中の人となつてしばしば俗界にあるのを忘れ、島に上がって釣をしても面白く、海に入って泳いで人魚となつて夢幻の境にある心地がする。」と表現しており⁴⁶⁾、九十九島は高所から展望することを評価していたことがうかがえる。

国立公園に指定されると、風景地成立期に整備された各視点場に至る、もしくは展望地同士をつないだりする市営定期観光バスの運行やそれに合わせた観光遊覧船の定期運行など、戦前期に整備された展望地を増強する整備がなされると同時に、長崎県内の他の観光地と佐世保をつなぐ交通機関が整備されていった⁴⁷⁾。観光遊覧船の発着所である鹿子前は集団施設地区に指定された。他に、鹿子前にはビジターセンターの建設や鹿子前海浜ホテルおよび九十九島観光ホテルも建設された⁴⁸⁾。

前述の弓張展望台は1962年に弓張岳展望公園となり⁴⁹⁾、烏帽子岳とともに第二種特別地域に指定され、烏帽子岳では園地や宿舍、展望台を有する県営の「青少年の天地」が整備された。また、市バスも鶴渡越を越して弓張岳まで開通している。この2地点は美しい自然の景色を保存し、その景観を楽しめるようにした風致公園にも指定されている⁵⁰⁾。各展望台は弓張岳が「見るだけでなく見せる展望台」長申山つつじ公園では園内に多くのつつじが植えられる⁵¹⁾など、各展望場所自体も見るとする対象にしようとして取り組んでいた。

修学旅行向けも含む各種パンフレットも佐世保市によって作成されており、いずれも遊覧船と展望地を組み合わせたコースを推奨している⁵²⁾ ⁵³⁾ ⁵⁴⁾。しかし、これらパンフレットに掲載されている展望地は全て弓張岳を中心に示されており、そこで用いられている写真も弓張岳からの写真が使われており、九十九島の展望地として鶴渡越よりも弓張岳の方が評価されていたといえる。

1956年頃からは九十九島において牡蠣の養殖が開始され⁵⁵⁾ ⁵⁶⁾、九十九島は広い範囲に渡って生業の場としても成立するようになった。

この時期は、視覚的にも物理的にも九十九島と内陸の結びつきが増強されたといえるが、特に集団施設地区に指定された鹿子前に設備投資がなされ、物理的な結びつき方が増強された。また、従来九十九島の景観が附属していた鶴渡越は、その主従関係が崩れ、さらに至近に新しい弓張岳が整備されたことにより、展望地としての評価を得られなくなってしまった。

(5) 安定成長期

1979年に田崎真珠による養殖が九十九島湾で開始された。この頃、佐世保市では素通り客が多いという課題と、国から払い下げられた針尾工業団地の新たな活用としてハウステンボスが計画され、リゾート法(総合保養地域整備法)の指定特定地域に指定されると、開業まで一気に事業が動いた⁵⁷⁾。佐世保海洋リゾート構想の核として

展海峰および弓張岳の造成や烏帽子岳高原リゾートの整備、ハウステンボスの集客効果を活用した九十九島地区への集客促進を目的にそれまでであった市営水族館を中心に鹿子前パールシーリゾートの再整備などがなされた⁵⁸⁾ ⁵⁹⁾。また、佐世保市に隣接し、石炭産業の凋落によって主な産業を漁業と観光に転換していった⁶⁰⁾ 小佐々町(2006年に佐世保市と合併)でも、冷水岳に展望台とともに物産館や野外ステージなどを有する冷水岳公園を整備している⁶¹⁾。

この時期は、海岸沿いの九十九島に至近な場所に施設が多く整備され、九十九島と内陸は視覚的な結びつきよりも物理的な結びつきが強化されたといえる。

4. 神社・名所と観光関連事業所の立地(図3, 4)

(1) 分布および展望地との位置関係

神社は佐世保市域全体に分布しているが、比較的海岸から離れた内陸の山間部に多く存在しており、沿岸域は少ない。名所は、前述したとおり奇岩怪石を対象としたものや軍港関係のものであり、佐世保港近辺と、神社同様に内陸の山間部に位置するものがほとんどであった。

一方、観光関連事業者の分布は、鎮守府が設置されていた時代から変わらずに佐世保港近辺に多く集積してきており、現在も半数近くがその近辺に集積している。

展望地と神社および観光事業所の位置関係をみると、展望地を中心とした半径500m以内には神社および名所はほとんどなく、また、観光関連事業所の集積も見られなかった。このことから、九十九島に対する展望地は名所や観光関連事業所等とは独立して存在していることがうかがえる。

(2) 可視領域との関係

神社・名所および観光関連事業所と多島海景観の可視領域の関係をみると、いずれも可視領域内に存在する割合は少なく、神社は2割程度、名所は1ヶ所のみ(展望地となっている赤崎岳)(図3)、観光関連事業所は全体の1割程度であった(図4)。また、佐世保市において九十九島と並んで観光資源となっているハウステンボスと西海橋は、双方ともに九十九島の可視領域には入っておらず、佐世保市の観光行政が九十九島の多島海景観とは関係なく行われているといえる。

これらの結果は、本来佐世保においては松島や瀬戸内海などで見られたような多島海景観を霊場などに「見立てる」といった眺めに意味を持たせる文化⁶²⁾ ⁶³⁾が当該地域になく、九十九島の景観を言葉で示す「意味の風景」がないまま、近代以降もその文化が定着せずに来訪者にとっても多島海景観を眺めるような状況が生みだされなかったことがうかがえる。

5. 利用者の捉え方

様々な作者によって描かれた佐世保十勝では、楠本硯水や井上頼徳が詩歌を歌っており(作成年不詳)、大正には九十九島を名所とする動きも見られた⁶⁴⁾。しかし、九十九島は佐世保十勝として必ず詩歌に詠まれていたわけではなく、一般的に認識されていなかったことがうかがえる。

紀行文や随想文を検索した結果、九十九島を描写した紀行文は極端に少なかった。随想文では九十九島を描写しているものはなく、

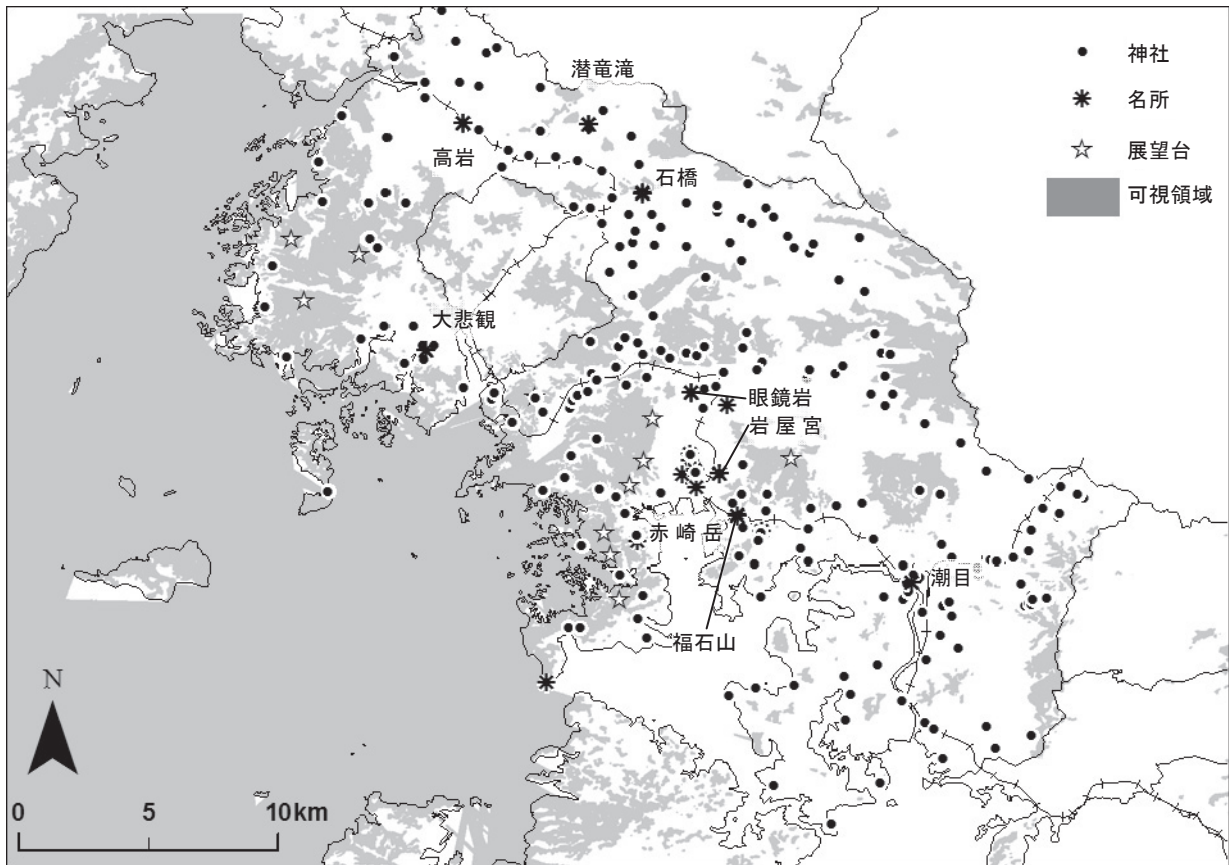


図3 九十九島の可視領域と神社・名所

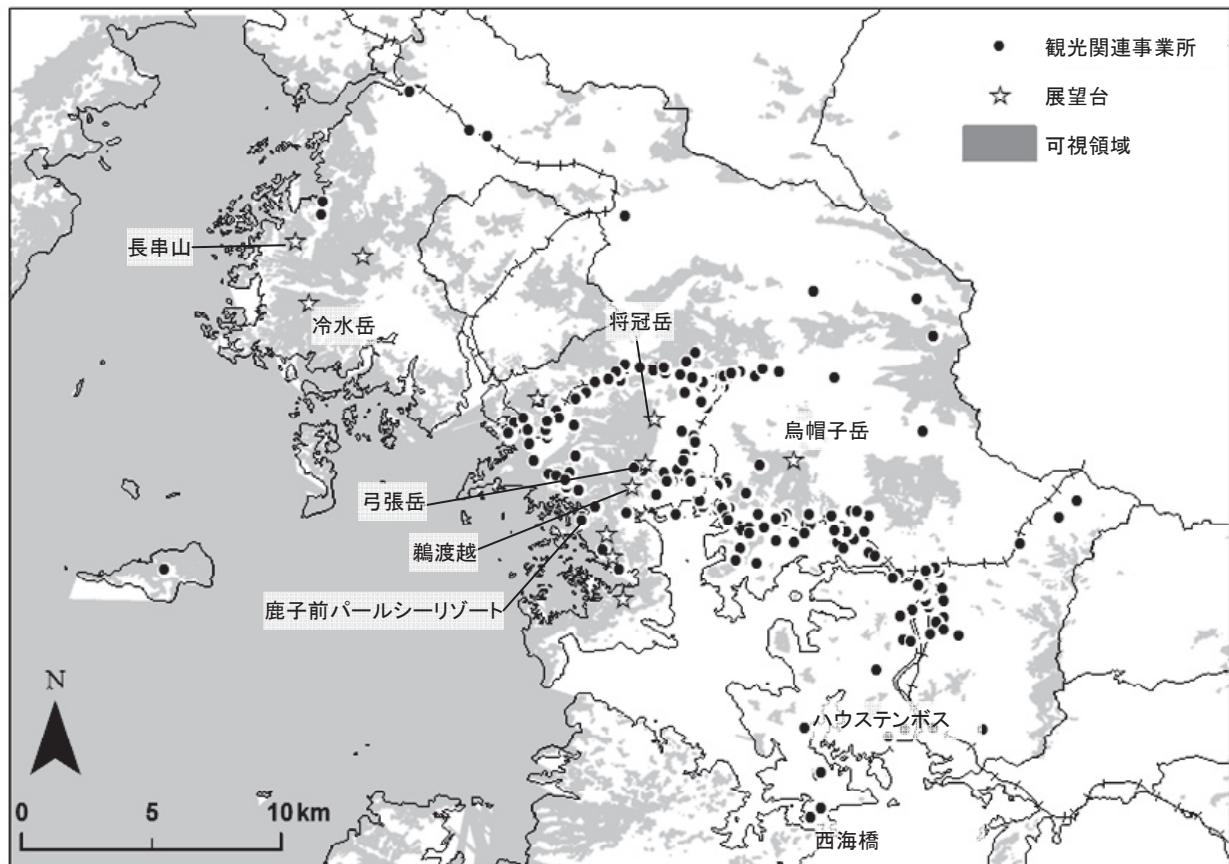


図4 九十九島の可視領域と観光関連事業所

表3 対象とした文献

No	著者名	文献名	発行年	種類
1	近藤鉄	佐世保繁昌記	1891	随想文
2	蒲原有明	松浦あがた	1898	紀行文
3	リーズデール	大英貴賓之日本観	1907	随想文
4	国木田独歩	愛弟通信	1908	随想文
5	北原白秋	邪宗門	1909	随想文
6	水野広徳	戦影	1914	随想文
7	松浦厚著	青島遊記	1915	紀行文
8	片岡覚太郎	平和の海より死の海へ	1921	随想文
9	幸田亀太郎	波まくら	1922	随想文
10	吉田紘二	白雲飛ぶ	1930	随想文
11	種田 山頭火	行乞記(二)	1931	紀行文
12	田崎勇三	癌研の病院室で	1959	随想文
13	木山捷平	西海の落日	1967	紀行文
14	高野斗志美	井上光晴	1974	紀行文
15	井上光晴	長崎・佐世保・平戸への旅	1974	紀行文
16	福田清人	島影にただよう異国のロマン	1978	紀行文
17	藤浦洗	開放された西海公園	1999	紀行文

佐世保を題材にした紀行文においても、軍港ではなくなった後でさえも専ら市街地を中心に描写しているにとどまっている。九十九島を描写した数少ない紀行文では、その捉え方はほぼ同じであった。同様の方法にて、国立公園指定において比較対象となった宮城県松島を描写した紀行文の数とを比較すると、圧倒的にその数は少ない。佐世保港を描写した文章中においても、九十九島を捉えたものはなかった。

描写は、軍港設置以前と戦後期で1文献ずつ(表3中文献2,11)、高度経済成長期に1文献(表3中文献13)、安定成長期に4文献(表3中文献14~17)あった。航路が充実した安定成長期においても、船上からの描写は1文献(表3中文献16)にとどまっており、いずれも展望地(弓張岳)からの俯瞰景か、どこからの描写か視点場を特定できない「場の景観」として、島を中心に描写している。

6. まとめ

以上、本研究で見えてきた通り、九十九島と佐世保市域は元々佐世保自体が寒村ということもあり強い結びつきはなかった。佐世保港が軍港となり、それに併せて人口が増えていく中で軍港を挟んで鶴渡越から九十九島を眺めるという視覚的結びつきが生じた。この頃は、九十九島の眺めはあくまでも鶴渡越に附属するものという主従関係が成立していた。軍港が廃止されると沿岸域の開発も進み視覚的にも物理的にも結びつきが生じた。九十九島の眺めには日本百景および西海国立公園に指定されたという意味づけと、軍用施設の転用により新たに出現した展望地である弓張岳の存在によって、それまでの鶴渡越との主従関係が崩れていったと考えられる。その後も視覚的・物理的な結びつきが強化されていった。しかし、湾内でカキや真珠等養殖の開始、ハウステンボスの集客効果を活用した沿岸域の整備など物理的な結びつきがさらに強化され、各展望地も、公園として整備され、島々を眺めなくてもその場所を楽しめるような、眺望行為がレクリエーション活動のひとつになってしまうようになっていった。すると、元々展望地から離れた九十九島を眺めるといった文化がなくその行為が定着したとはいえない佐世保においては、どこから眺めるといふ行為を伴って体験される実像よりもイメージに近い「場の景観」が主流となり、視覚的な結びつきはあるにしても、多島海景観のイメージを伴って海に出て九十九島より近

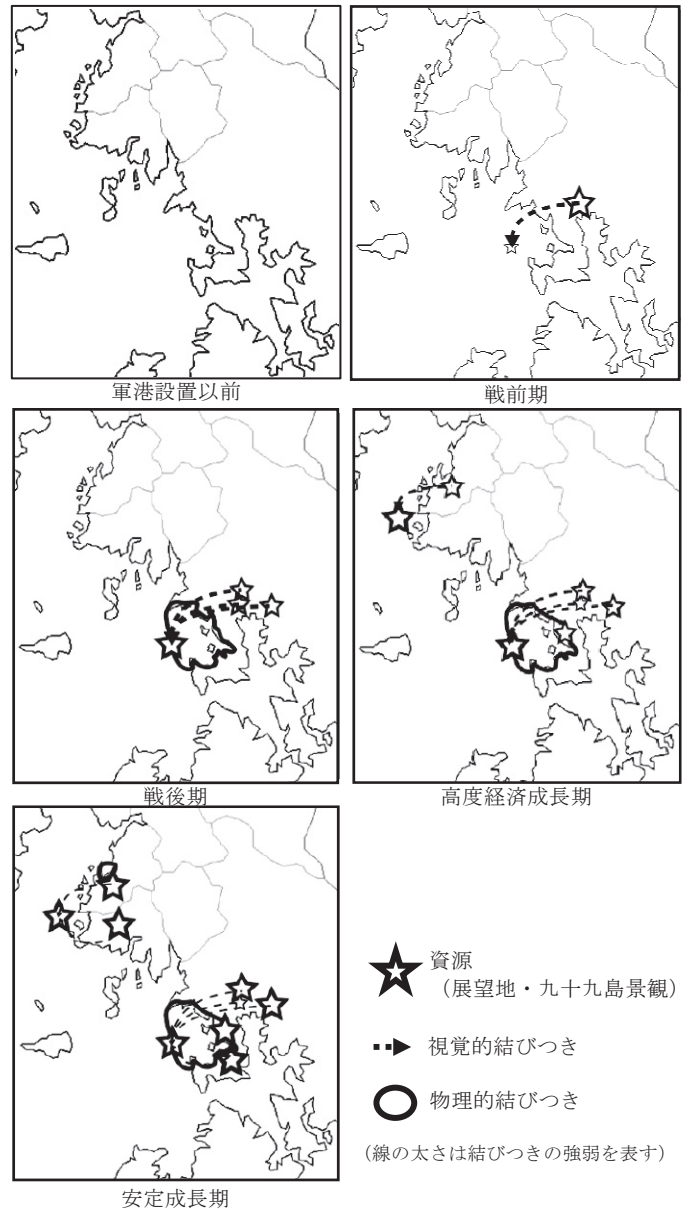


図5 九十九島と内陸の結びつきの変遷

づいていくといった物理的な結びつきのみが、より強まったと考えられる(図5)。

こうした経緯から、国立公園指定当初から現在まで続く環境省の多島海景観を展望するという国立公園指定の趣旨から離れて、現在九十九島では島に上陸して自然観察を行ったり、湾内をめぐるカヤックなどの「エコツアー」(対象に対して実際に触れたり近づくなどする物理的な結びつき)が展望地から九十九島を眺める(視覚的な結びつき)ことよりも盛んになっていったと考えられる。地域制であるわが国の自然公園は、その管理運営において地域文化と併せて検討すべきであるといえる。

参考文献

- 1) 小林昭裕:利用者向けの印刷物に掲載された写真にみられる景観資源の特徴と変化 阿寒国立公園を事例として, 環境科学研究所報告, No.8, pp.309-320, 2001.8
- 2) 猪瀬怜子・栗田和弥・畔柳直美・宮川浩・麻生恵:阿蘇地域における草原景観の分類とその景観イメージに関する研究, ランドスケープ研究, Vol.65, No.5, pp.621-626, 2002.3

- 3) 國井洋一・古谷勝則：尾瀬国立公園のシークエンス景観に対する定量指標と主観評価の関連性について，ランドスケープ研究，Vol. 74, No. 5, pp. 633-636, 2011. 3
- 4) 一場博幸・下嶋聖・古谷勝則・麻生恵：尾瀬ヶ原の休憩テラスから見た木道上の混雑感評価に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 69, No. 5, pp. 737-740, 2005. 3
- 5) 小林昭裕：自然公園での利用体験の質を把握するための概念及び手法上の問題点に関する一考察，ランドスケープ研究，Vol. 67, No. 5, pp. 591-596, 2003. 3
- 6) 町田怜子・麻生恵：景観認識特性に基づく阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域における二次草原の景観計画に関する基礎的研究，ランドスケープ研究，Vol. 71, No. 5, 693-696, 2007. 3
- 7) 西田正憲：瀬戸内海の発見，pp. 184-222, 中公新書，1999. 3
- 8) 伊藤弘：大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の評価，日本建築学会計画系論文集，No. 656, pp. 2391-2396, 2010. 10
- 9) 国立公園部：自然公園候補地の紹介 九十九島，pp. 46-47, 国立公園，No. 36・37, 1952. 12
- 10) 環境省自然環境局：西海国立公園 平戸・九十九島地域管理計画書，p. 14, 2005. 7
- 11) 武正憲・斎藤馨：九十九島エコツーリズムの展開における自然観光資源とガイド従事者の関係，ランドスケープ研究，Vol. 75, No. 5, pp. 493-496, 2011. 3
- 12) 篠原修：土木学会編 新体系土木工学 59 土木景観計画，pp. 20-39, 技報堂出版，1982. 6
- 13) 伊藤弘：近代の松島における風景地の整備と眺めの関係，ランドスケープ研究，Vol. 74, No. 5, pp. 769-772, 2011. 3
- 14) 溝口周道：近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文の特徴，ランドスケープ研究，Vol. 65, No. 5, pp. 371-374, 2002. 3
- 15) 西田正憲：江戸後期における瀬戸内海の新しい風景視点の萌芽，ランドスケープ研究，Vol. 58, No. 5, pp. 33-36, 1995. 3
- 16) 平澤毅：延国雑記にみる名所・風景の記述，ランドスケープ研究，Vol. 63, No. 5, pp. 367-370, 2000. 3
- 17) 山口敬太・出村嘉史・川崎雅史・樋口忠彦：近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究，土木学会論文集D, Vol. 66, No. 1, 14-26, 2010. 1
- 18) 押田佳子・横内憲久・岡田智秀・瀬畑尚紘：紀行文より捉えた近世鎌倉における観光経路および滞在拠点の成立過程に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 74, No. 5, pp. 431-436, 2011. 3
- 19) 小野良平：用語 鎮守の森 の近代的性格に関する考察，ランドスケープ研究，Vol. 73, No. 5, pp. 6761-6774, 2009. 3
- 20) 佐世保市役所：佐世保志上巻，p. 71, 1915. 8
- 21) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 389-390, 1956. 8
- 22) 佐世保市役所：佐世保市史総説編，p. 293, 1955. 4
- 23) 田代行太：佐世保管見，pp. 145-154, 1903. 8
- 24) 佐世保市役所：佐世保市史総説編，p. 344, 1955. 4
- 25) 佐世保市役所：佐世保市史総説編，p. 345, 1955. 4
- 26) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，p. 552, 1956. 8
- 27) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，p. 553, 1956. 8
- 28) 北村徳太郎編：松尾良吉翁，pp. 112-115, 親和銀行，1942
- 29) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 554-555, 1956. 8
- 30) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 624-629, 1956. 8
- 31) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，671, 1956. 8
- 32) 内閣：佐世保都市計画風致地区決定ノ件，1933
- 33) 佐世保市役所：佐世保案内，p. 4, 1922
- 34) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 558-560, 1956. 8
- 35) 鹿町町教育委員会：鹿町郷土誌，pp. 419-420, 1961
- 36) 佐世保市役所：佐世保市史総説編，pp. 356-357, 1955. 4
- 37) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 562-563, 1956. 8
- 38) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 564-565, 1956. 8
- 39) 田村剛：西海国立公園候補地と観光施設，佐世保市役所事業課内西海国立公園期生会，1953
- 40) 長崎県：五島列島～九十九島～平戸島学術調査書 総論，pp. 8-9, 1952
- 41) 佐世保市：国立公園候補地 九十九島 パンフレット
- 42) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市史 70年史 上巻，pp. 222-223, 1975
- 43) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，p. 601, 1956. 8
- 44) 鹿町教育委員会：鹿町郷土誌，p. 77, 1961
- 45) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 569-586, 1956. 8
- 46) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 592, 1956. 8
- 47) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市史通史編下巻，pp. 599-600, 2003. 4
- 48) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市政 70年史下巻，pp. 73-75, 1975
- 49) 前掲書 42)
- 50) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市政 70年史下巻，pp. 75-81, 1975
- 51) 鹿島町郷土誌編さん委員会：鹿島町郷土誌，p. 47, 2004.
- 52) 佐世保観光協会：西海国立公園させぼ九十九島 旅行の友（パンフレット），1955
- 53) 佐世保市観光課：西海国立公園 パンフレット，1956
- 54) 佐世保市商工部観光課：修学旅行のために 西海国立公園・佐世保・九十九島周辺（パンフレット），1960
- 55) 佐世保史料編さん委員会：佐世保市政 70年史 上巻，pp. 542-543, 1975
- 56) 末武邦彦：九十九島におけるカキ養殖の歴史・現状・将来，佐世保市 カキ講話録 資料，2008
- 57) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市史通史編下巻，pp. 848-850, 2003. 4
- 58) 佐世保市史編さん委員会：佐世保市史通史編下巻，pp. 848-850, 2003. 4
- 59) 佐世保市史編さん委員会：佐世保の歴史，pp. 226-227, 2002
- 60) 小佐々町郷土史研究会：小佐々のあゆみ，pp. 62-63, 1980. 6
- 61) 小佐々町郷土誌編さん委員会：小佐々町郷土誌，pp. 527-528, 1996. 3
- 62) 島尾新・長谷川成一：日本三景への誘い，pp. 94-97, p. 138, 清文堂，2007. 2
- 63) 西田正憲：瀬戸内海の発見，pp. 102-124, 中公新書，1999. 3
- 64) 佐世保市役所：佐世保市史産業経済編，pp. 484-496, 1956. 8

(2012年5月1日原稿受理, 2012年8月24日採用決定)